研究発表

DDC（Dewey Decimal Classification）の実効性を比較検証する
～日本の教育事情に対する付与実験をもとに～

分類研究分科会
文教大学越谷図書館　藤倉　恵一

１．はじめに

分類研究分科会の基本となるテーマは，いわゆる図書分類法だけでなく件名，シソーラス，Indexing 理論などを含んだ広義での図書館分類法の研究である。今期の活動は前期（2002～03 年度）の研究テーマを引き継いで，“Dewey Decimal Classification”（デューイ十進分類法；以下「DDC」）を主たる研究課題とした。

前期は“Bliss Bibliographic Classification 2nd edition”（ブリス書誌分類法第 2 版；以下「BC2」）の性能検証を研究課題とした [1) 2)]。BC2 はファセット分析理論を用いた分析合成型分類法（analytico-synthetic classification）であり，分類対象となる主題の構成要素を分析したものを一定の順序で合成することにより，複合主題であっても的確に記号表現ができるようになっている，理論的にはもっとも精緻とされる分類規則である。当初は BC2，DDC を研究し，「日本十進分類法」新訂 9 版（以下「NDC9」）を含めた 3 つの分類法を比較検討する予定であったが，会期中の 2003 年に DDC の改訂版が発表されることが明らかになったため，DDC と他分類法との比較は今期に繰り越された。

本稿では DDC の 4 つの版を採り上げ，前期の研究手法を踏襲して DDC がもつ主題表現力，日本の事情への対応，改訂がもたらした影響などを検証する。

２．DDC の概略

DDC は，Melvil Dewey（1851-1931）が 1876 年に発表した図書分類法であり，Dewey が米・Amherst College の図書館補助員として働いていた際に考案・作成した分類体系が基礎となっている。

その記号法は“Decimal”（小数，あるいは十進法）という語が示すとおり，記号は 0～9 のアラビア数字と小数点のみを用いる。アルファベットや記号を用いないことによって誰にでも理解しやすく，分類も排列も容易に行うことができる。

当時としては画期的といえる体系であり，NDC や「韓国十進分類法」（KDC）などの成立にも大きな影響を与えたことは疑いない。のちに DDC をもとに“Universal Decimal Classification”（国際十進分類法；UDC）が誕生するが，それでもなお DDC は世界各国で使用されており，事実上の国際標準的分類法であるといってもよい。

DDC は 2006 年 1 月現在，2003 年に刊行された 22 版 [3)] が最新版となっている。

Dewey は 1931 年に没したが，それまでずっと DDC の改訂に関与し続けた。没後最初の版である 14 版（1942 年）の改訂方針は Dewey が改訂に関与していた頃と大きく変わることなく，記号・項目増が改訂の中心であり，記号が理論的な裏づけを欠いたまま増殖するため，交差分類などを各所にもつ肥大した分類法であった。

しかし，1951 年の 15 版は項目数を約 6 分の 1 に減じた大幅改訂であり，図書館界から大きな反発を招いたが，真の意味での「改訂」であった。そしてその反動として DDC は 16 版以降「フェニックス」（Phoenix）と称する分野ごとの内容改訂の仕組みを導入し，以後およそ 8～10 年に 1 回の改訂で毎回いくつかの部門で大きな見直しを行っている。

DDC の分類法上の欠点は，十進分類法そのものが持つ欠点であるといってよい。主題分野を 10 に区分することで容易に記号の選択・付与が可能になっているのが特徴の分類法であるが，反面，区分肢が 9 つ（総記の 0 を除く）に制限されているので，対象となる領域によって記号が不足するところと，逆に余るところが出てくる。

また，列挙型分類法であるため複合主題や新主題への対応に弱いという欠点を持っているが，DDC の場合は前述したとおり頻繁な改訂によって分野ごとに改善が図られている。特に近年の改訂では分析合成のためのファセット分析手法を採り入れることもしばしばあり（20 版音楽，21 版生命科学など），書誌分類としてその性能を高めつつある。

３．検証の手法

前期，BC2 の性能を検証した際に用いた手法を踏襲する。

３．１　対象領域

教育（Education）を中心とする。

教育という領域は普遍的な内容を持つ分野である一方，その周辺領域に絶えず新事象・新語が発生するという特徴をも持っている。新事象・新語は一般的に分類法が苦手とするところといえるが，それらへの対応は分類法の性能試験の一要素となりうる。

なお，前期は BC2 の Class J: Education[4] を使用した。

３．２　付与対象

自由国民社刊「現代用語の基礎知識」1993 年[5]，2003 年[6]，2005 年[7]の各版における教育分野の見出語・計 129 項目（1993 年全 81 項目，2003 年 32 項目，2005 年 16 項目）に対し，DDC の分類記号を付与する。

付与対象として「現代用語の基礎知識」を選んだのは，分野ごとに当該領域・周辺領域のトピックを包括的に扱っており，特に新事象・新語を多く含んでいるのがまず大きな理由である。また，見出語に対して辞書的な「意味」ではなく事象の「解説」が付されていることから分類付与の助けにもなるという理由もある。

前期の研究では当時の最新版である 2003 年と，その 10 年前の版を使用した。1993 年と 2003 年の計 166 項目を対象に設定したが，付与結果の検証に時間を要し，実際には 1993 年の項目の全部と 2003 年の項目の一部を考察するにとどまった。

今期は前期使用した版に最新の 2005 年版を加え，重複している項目などを除いた計 129 項目を付与対象とした（ただし，本稿においては研究報告大会開催時点で検証が完了している 129 項目中の 113 項目（「現代用語ー」2005 年に該当する項目を除く分）に対して考察を行うものとする）。

３．３　使用する版

DDC の 20 版（1989 年），21 版（1996 年），22 版（2003 年）および 13 版（1932 年）を使用する。

DDC の 370 Education は 21 版で大規模な改訂が行われている。そのため，改訂前後の 20 版と比較するために 20，21 の各版を，また最新版ということで 22 版を採り上げた。

さらに，分科会の参加メンバー館に 13 版の所蔵があったため，これも使用することとした。DDC13 版は Dewey 生涯最後の版であり，初版の直接の後継者であるといえる。

３．４　分類付与・検証手法

付与者は DDC の１つの版を担当し，付与対象の見出語および内容を参考に，適当と思われる DDC の記号を付与する。付与した記号を相互に検証し合い，記号を確定する。

前期の研究では付与者 7 名が付与対象を頭から順に割り振り（1 人あたり約 24 項目），それぞれに BC2 と NDC9 版の記号を付与するという手法をとった。

今期は会員 4 名（それぞれ 1 つの版を担当）に 2005 年度夏期研究合宿のゲスト参加者 3 名（20，22，13 版を担当）の計 7 名が 129 項目に対し分類を付与，その結果を相互に比較するという手法をとった。ひとつの見出語に対し 7 つの付与結果が寄せられ（21 版を除く各版に 2 つずつの付与結果が出ることになる），それぞれの付与結果について並行して検証するため，全体から見て版ごとの付与基準・結果にゆれが生じにくいようにした。

３．５　性能検証方法

確定した 4 つの分類記号について相互に比較し，使用感・表現力・性能・改訂の影響などを検証する。

４．基礎研究

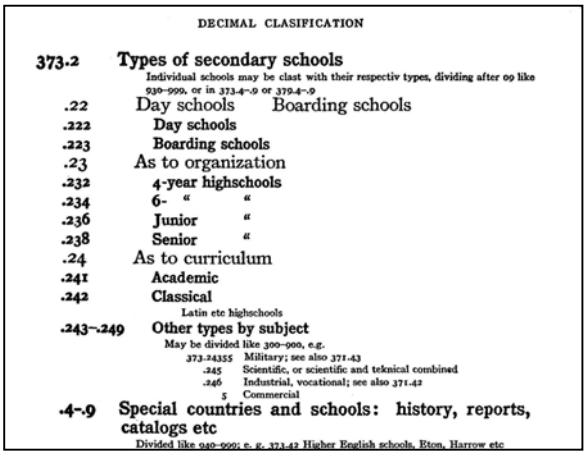
４．１　Dewey 時代の DDC

付与と検証に先立つ基礎研究において，DDC がわが国の近代的図書館活動の黎明期にどのように紹介されたかを示す文献を輪読したことで，今回比較研究で使用した 13 版について基本的な知識を得ることができた。

1930 年に刊行された「DEWEY 十進分類法導言」（1982 年に不二会より復刻版刊行）[8]は DDC12 版（1927 年）“Introduction”の翻訳であり，NDC 初版の刊行元である間宮商店を創業し，青年図書館員聯盟を結成した間宮不二雄（1890-1970）によるものである。

その文体は旧漢字とカナ表記によるものであるが，訳語に今日と大きく異なる点はなく，間宮たちが明らかにわが国の分類研究の最先端であったことをうかがうことができる（そして NDC の初版刊行（1929 年）がこの本の刊行の前年であったことからすると，DDC が NDC に与えた影響が小さくないということを裏づける資料のひとつであろう）。

その文献から知りえた DDC12 版（13 版もほぼ同じと考えられる）の特徴のひとつに，“Simple Speling”と称する綴字法がある。これは語の発音を重視し，Filosofy (Philosophy), Sistem（System），Uze（Use）などのように表記する方法である。


DECIMAL CLASIFICATION

373.2 Types of secondary schools
Individual schools may be clast with their respectiv types, dividing after 09 like 930–999, or in 373.4–.9 or 379.4–.9
.22 Day schools Boarding schools
.222 Day schools
.223 Boarding schools
.23 As to organization
.232 4-year highschools
.234 6- " "
.236 Junior "
.238 Senior "
.24 As to curriculum
.241 Academic
.242 Classical
Latin etc highschools
.243–.249 Other types by subject
May be divided like 300–900, e.g.
373.24355 Military; see also 371.43
.245 Scientific, or scientific and teknical combined
.246 Industrial, vocational; see also 371.42
5 Commercial
.4–.9 Special countries and schools: history, reports, catalogs etc
Divided like 940–999; e. g. 373.42 Higher English schools, Eton, Harrow etc

図 1　DDC13 版より。373.234 には“year”と“highschools”にそれぞれ上の項目と同じであることを示す“（ノノ字点）が使用されている。この種の略記も旧 DDC の特徴といえよう。

この頃の DDC は，現在の DDC に比べるとシンプルな表のつくりで項目も少なく，NDC と同じような典型的な列挙型分類法であるように見える。しかし，図 1 中の 373.243-.249 Other types by subject（学科タイプ別の中等

学校）のように，373.24 に 355 軍事科学 Military Science を付加し 373.24355（中等学校の）軍事科と分類することができるようになっているなど，この頃既に記号の合成による複合主題への対応を始めている。

４．２　20→21 版の教育分野改訂

DDC21 版で 370 Education は大幅に改訂された。しかし，同時に改訂された 570-590 Life Science 生命科学がファセット分析の手法を導入したのに対し，370 は Number building（番号構築）の性能向上と名辞の調整が行われたにとどまる。376　婦人教育と 377　宗教と教育については 21 版で削除された（記号の合成によって 370 内で適宜分類可能）。

５．付与結果の検証

５．１　改訂による分類番号の変更

13→20 版で付与結果（分類番号）に差異があったものは，113 項目中 70 件あった。これは(1)項目が増え，より適切な番号付与が可能になった，(2)当時は存在しなかった事象（コンピュータを利用した教育など）に対して番号が付与できるようになった，(3)記号の再配置によって分類される位置が変わったという理由に大別できる。

20→21 版では前述したように大きな改訂があったわけだが，20→21 版での付与結果の差異は 113 項目中 15 件に過ぎない。これは(1)370 や 371 の記号再配置によって分類される位置が変わった，(2)記号再配置によって記号が簡略化された，(3)体系が細密化したことなどが挙げられる。

	DDC13	DDC20	DDC21	DDC22
370	Education			
371	Teachers Methods Disciplin	School organization and management; Special education	Schools and their activities; Special education	
372	Elementary education			
373	Secondary Preparatory	Secondary education		
374	Adult education			
375	Curriculum Course of study	Curriculums	Curricula	
376	Education of woman		—	
377	Religious, ethical and secular education	Schools and religion	—	
378	Colleges and universities	Higher education		
379	Public schools Relation of state to education	Government regulation, control, support of education	Public policy, issues in education	

表 1　DDC13，20，21，22 各版の Outline（概要）対照表　網掛け部分は概念が各版で共通していることを示す。20→21 版改訂時に 376・377 は廃止されているが，それ以外は Outline のレベルでは大きな変更箇所がないことがわかる（名辞や表現方法が異なる程度）。

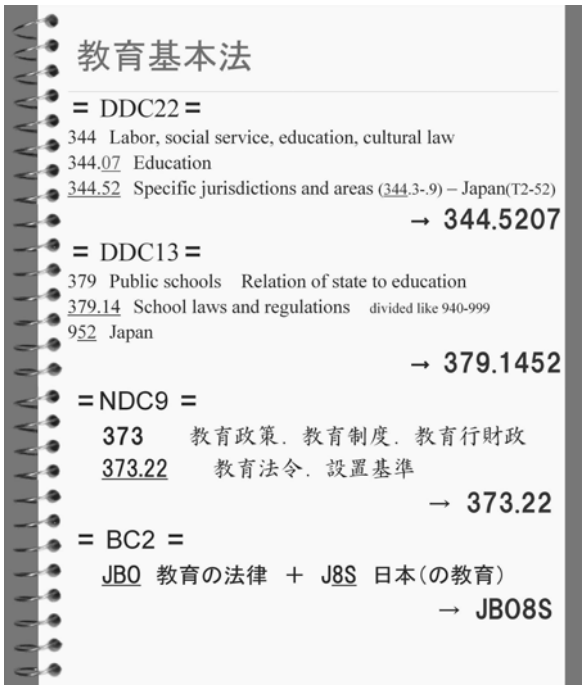
21→22 版については，教育分野にほとんど改訂が見られなかったが，法律（340 Law）に大掛かりな改訂（部分的にファセット化）があったため，今回の付与結果では教育の法律に関する 2 件が該当した。なお，13 版から 22 版に至るまで結果に差異がなかったものは 113 項目中 38 件，逆に 13 版，20 版，21 版で付与結果が毎回異なっていたものは 10 件あった。

ここから導き出されるひとつの考察としては，DDC が行っている改訂の影響は，図書館が懸念するほど極端に大きなものではないのではないか，ということである。

５．２　主題表現力の検証

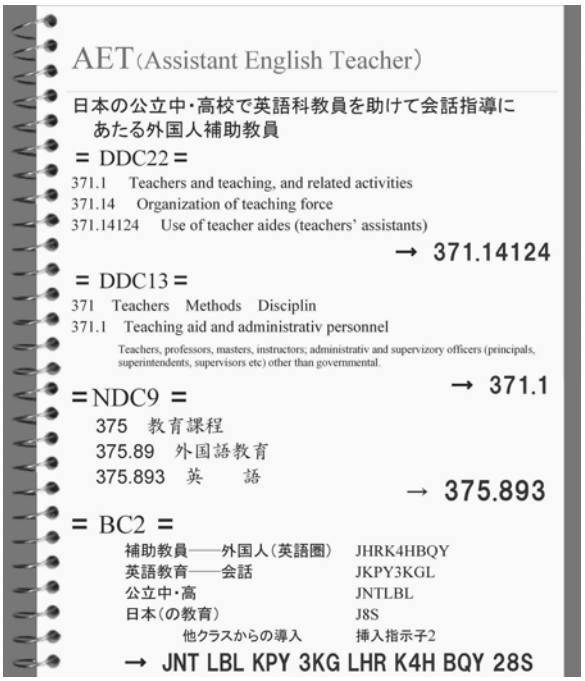
次に，いくつかの項目に対する付与結果をもとに，DDC が BC2 や NDC9 と比べてどの程度の主題表現力を持っているか比較する。

例 1：教育基本法



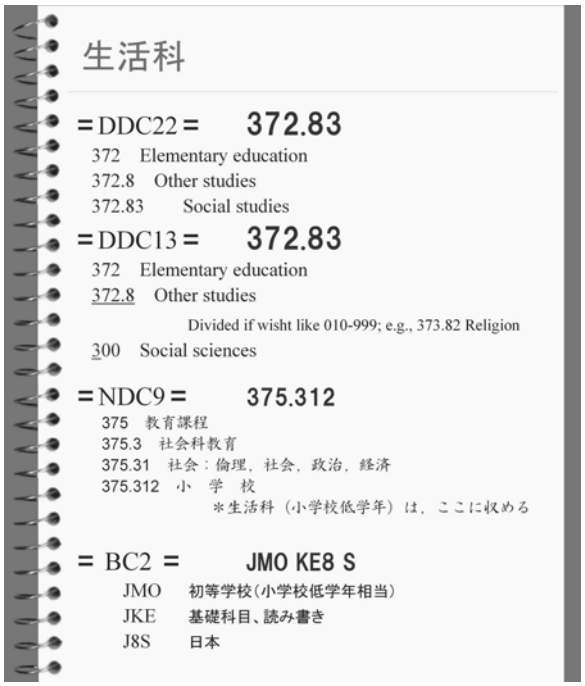
DDC22 と 13 では考え方が異なるが，いずれも「日本の・教育の・法律」を表現できている。NDC9 では「教育の・法律」しか表現しきれていない。

例 2：AET



DDC22 では「補助教員」，DDC13 では「教育関係者」としか分類できない。NDC9 では逆に，英語教育としか分類できない。BC2 では「日本の公立中・高で英会話を教える英語圏出身の外国人補助教員」とまで記号化できる。

例 3：生活科



NDC9 以外は「こじつけ」のような分類である（BC2 でも適切にこの概念を記号化できたとは思えない)。が, NDC の場合も表中に「適当な場所」がないからここに置いたようなものであり, 生活科のカリキュラムが持つ理科教育的側面を無視していることから, 分類として理論的に正しいとはいいがたい。

これらの付与結果からいえることは，DDC の記号表現力は NDC よりすぐれ，本来 NDC が有利であるはずの日本固有の事象についても互角であるといえる。

６．まとめ

大学図書館はカリキュラムに沿った専門資料群を備えているのが一般であり, 学問領域によってはNDCの表現力では残念ながら対応しきれない箇所がしばしば存在する。

しかし，NDC より主題表現力に富んでいることを今回証明できたDDCは本来アングロサクソン圏文化の視点を中心とした分類法であり, 日本の文化事情に必ずしも対応しきれているとはいえないこともまた指摘されていることである。

たとえば今回検証例とした 370 Education が今後の改訂でファセット化されれば事情は変わってくるが、21 版で改訂されたこの分野が近い将来、再度大きく改訂されるということは考えにくい。

自然科学系分野はともかく，人文・社会科学系分野であれば現在のDDCに日本の事情にある程度対応できる別法を用意するか, 主題分析の機能をより高めないと, 日本国内資料の分類にはDDCを有効に活かしきることはできないのではないだろうか。

参考文献等

1. 萬谷衣加, 藤倉恵一. Bliss Bibliographic Classification 2nd edition（BC2）と NDC を比較する．私立大学図書館協会会報. 122, 2004, p.91-96.
2. 萬谷衣加．BC2（Bliss Bibliographic Classification 2nd ed）分類を付与する試み．TP&D フォーラムシリーズ．12-14, 2005, p .95-110.
3. Mitchell, Joan S [et al]. Dewey decimal classification and relative index. 22nd ed. Dublin, OCLC Online Computer Library Center, 2003,4v. (ISBN 0910608709(set))
4. Foskett, D.J. and Foskett, Joy. Class J: Education.1990 revision. London, Bowker-Saur, 1990, xxvi, 80p. (Bliss Bibliographic Classification 2nd ed.). (ISBN 0862912784)
5. 碓井正久．“教育問題用語の解説”．現代用語の基礎知識．1993 年版．東京，自由国民社, 1993, p.886-897.
6. 佐藤一子, 鈴木眞理．“教育・学校問題用語の解説”．現代用語の基礎知識. 2003．東京，自由国民社，2003，p.944-956.（ISBN 4426101212）
7. 佐藤一子, 鈴木眞理．“教育・学校問題用語の解説”．現代用語の基礎知識. 2005．東京，自由国民社，2005，p.906-918.（ISBN 4426101239）
8. Dewey, Melvil（間宮不二雄訳）. Dewey 十進分類法導言．武蔵野，不二会，1982, 111p.